

蝶が岳

「登って描く」というアルパインスケッチクラブの本旨を体現した山行になった。

前夜の天気予報は怪しげだったが、朝の天気は好転しつつあった。早朝 5 時、担当幹事の津田さんや山研の内野さんの用意してくれた朝食を摂り、予定通り 6 時に出発した。一行は、宇田、田中(清)、橋本、菅沼、小出、田中(正)の 6 名であった。足並みがそろって 2 時間足らずで徳沢に着き、紅葉真っ盛りの涸沢を目指す人たちで賑わう徳沢をあとに、まず急な斜面の登りに掛った。名前の通りに長い尾根だが、前半標高差 600m の急登を過ぎれば前夜齊藤さんが言った「スキーでシール登高」のできる尾根になる。

深い樹林帯をジグザグに 1 時間半登って 9 時半には 2100m 超の地点に達した。これで急登区間は通過したと少し安堵した。目の前にみえる台地を登りきれば、あとは長堀山へ続く緩やかな尾根になる。小憩後は直登して少し右へ等高線に沿ってトラバースし、さらに標高差 200m を登りきって台地の上に出た。尾根は幅広になり登りは緩やかになった。変化のない樹間の緩登を続け、前回の小憩から 1 時間を経て、尾根の鼻にある 2450m 地点に達したと思い休憩を取った。ここからの出発に際して「あとワンピッチで長堀山に着くので昼食にしましょう」と私は言った。

赤い小さな実をつけた植物があちこちに見受けられた。少しずつ色合いや大きさの違うそれらがマイズルソウ、ゴゼンタチバナ、チゴユリだと小出さんに教えてもらった。チゴユリなど葉っぱは枯れてしまっているのに赤い実が健在なのには驚くばかり。植物の生命力と生き延びる仕組みの不思議さに感じ入った。

もうこの次の高みが頂上だろうと期待しつつ登ったが一向に着かない。似た地形が続く。黒い水を湛えた小さな池を過ぎ、先の小憩から 1 時間を超えて昼近くなってきたのでランチタイムにした。なぜ着かないのか。地図を見直し、前回の小憩地点は 2450m ではなく、約 150m 下の尾根の鼻だったのだと気付いた。昼食後の 20 分で長堀頂上到着。旗を広げて記念写真を撮った。

ここは 2654m で蝶が岳とほぼ同じ標高である。ここから下りになる。景観が一変し、紅葉真っ盛りの世界に入った。黄、紅、橙、赤などの色彩に包まれて夢見心地のプロムナードを行く。徳沢から 1 日で蝶をピストンだという若者グループと行き違う。最近の山登りは忙しい。景色に見とれる暇は無かる。名前が素敵な(見てがっかりする)妖精の池を過ぎるともう蝶の頂上は近い。最後の一登りで頂稜に出た。谷の向こうに山小屋が見えた。それを左に見ながら頂上へ登って行くと真新しい標柱が立っていた。それには「蝶が岳頂上・2677m」と書いてある。昔の地図では三角点のある 2664m ピークが蝶が岳の頂上になっている。私の所有するコンサイス日本山名辞典(1979 年発行)でも蝶が岳の標高は 2664m と書いてある。その地点へは小屋の向こう蝶槍方面へさらに 30 分ばかり行かねばならない。最高地点を頂上と改定したのなら(誰が変更したのか知りたいものだが)それはそれで結構なことだから、われわれもここが頂上だと受け入れて 13 時 45 分登頂とした。また旗を広げて記念写真を撮り(宇田さん苦心のセルフタイマーによる撮影)、予定通りに 14 時丁度に蝶が岳ヒュッテに着いた。横尾から単独行の原山さんが先着していて合流した。

さあ描こうというところだが、四囲はガスに包まれていて何も見えない。ホールでお茶にして天気予報を流しっぱなしのテレビ画面をみると、明日はぴかぴかの快晴らしい。それなら明日で良いやと駄弁っていると、熱心な小出さん、宇田さんが様子を見に行ったら山が見え始めているという。半信半疑で外へ出てみると、あっと驚く景観が広がっていた。槍から穂高、焼岳までが圧倒的な迫力で迫ってくる。全景全開である。新雪はまだ来ていないが、紅葉が素晴らしい。とりわけ茶臼の頭、慶応尾根、早稲田尾根、屏風の頭、東尾根、横尾尾根、天狗原辺りの 2500m から 2800m 位の色彩が見事である。慌ててスケッチブックを取りに戻って出てみると、みなさん呆然自失している。あっという間にふたたび総てはガスの中に没したのである。

しかし、それは予告編だったのだ。しばらくして徐々に晴れ始めたガスは、今度はしっかり上がって行き、頂上の四囲 360 度の展望が見る見る広がっていった。小屋の前の展望所に立って槍から逆時計回りに、北穂、涸沢岳、奥穂、前穂、焼岳、霞沢、乗鞍、御岳、2677m 頂上から左へ、中

ア、南ア、富士、八ヶ岳、蓼科山、浅間山(夕方は雲海の下で見えなかったが翌朝煙を吐く姿がくっきり見えた)、さらに左へ菅平、戸隠方面は標高が下がって明確に山は見分けられない。そして、直ぐ間近かに常念、燕、東天井、大天井、牛首、西岳、北鎌尾根と続いて槍に戻る。

いったい何処を描けば良いのか。余りの豪華さにしばらくは呆然と見とれていた。みなさんは取り合えずという雰囲気が一番手前の常念を描き始めたが、スケッチブックだけを抱えて慌てて出てきた私にはペンも鉛筆もない。ひとり戻ってゆくと、小屋の前で小出さんが穂高を描いている。筆が早い小出さんのこととともう素描を終えて彩色に掛るところである。そこで小出さんの水彩ペンを借りてスケッチブックを開いた。ランドスケープ 4 号を見開きにして左右 70cm に槍から前穂までを展開することにした。その時通りかかった娘さんが小出さんのスケッチに目を留めて「そこまでお描きになるのにどれくらいの時間が掛かりましたか？」と尋ねた。「さあ、10 分余りかなあ」と小出さん。「ええっ、10 分でそこまで！」それを聞きながら私は画面に山々をどう収めるかを思案した。槍、大喰、中岳、南岳、大キレットまでを右画面に、北穂から潤沢岳、奥穂、前穂を左画面に入れると決めて、まず稜線をおおまかに描いた。構図が決まったところで、槍の右に僅かに北鎌尾根を描き、頂上から南東へ下る東鎌尾根、大喰から天狗原への尾根、中岳から下る長大な横尾尾根を描き、それぞれから伸びる支尾根を描いて槍沢を形成していった。

「最初は輪郭だけだったのに、次々に山が生まれてくる！」私の画面を覗いていた娘さんが感嘆の声を上げた。小出さんへの問いかけからして、この方は絵の制作進行に興味があったのだろう。そこへ私が白紙から描き始めたものだから、ますます興味をそそられて立ち去ろうとしなくなった。あまりに感心してくれるので黙っているのは失礼かと思って「こういう素晴らしい景色を見ると誰でも思い出に留めたくなるでしょう？ たいいていの方は写真を撮りますが、シャッターを押すのは一瞬です。それで安心してしまつと一瞬の印象だけで深く記憶に留まりません。スケッチは感動の対象と時間をかけて向き合つて一筆一筆描いて行くので印象は深まり、記憶も深化するのですよ」とか何とか、出任せの能書きを垂れたら「本当にそうですわねえ。スケッチは写真より素晴らしいですね」と付いて来てくれる。あまりに素直な娘さんなので、その純真さでは誰かに騙されかねないとし少し心配になった。夕食の時刻になったので素描だけで切り上げた。その夜更け、原山さんに教えられて星を見に外に出た。深夜 1 時半、左に大きく傾いたオリオンが中天に掛り、昴が高く光っていた。天の川が白く霞み、いつもは直ぐに見つかる白鳥座が紛れるほどの星々が満天に輝いていた。この前これほどの星空を見たのは何時だったろう。

翌朝は快晴で明けた。小屋の中からでも日の出が見えた。写真を撮る人が多いので 5 時からの朝食は閑散としていた。われわれは準備が出来た人から小屋の周辺で描き始めた。私は昨日の素描に彩色した。同じ場所で小出さんも仕上げに掛った。宇田さんも傍に来た。三人になったし、朝の人出も多かったので覗きにくる人もたくさんいた。小出さんが愛想良く応対して絵展の PR をした。中には、交通会館には良く行くので絵展は絶対に見に行くと言った方もいた。その人はどういうわけか三人の名前を一人ずつ聞いてメモしていた。この名の作者の絵を見ようという事なのかもしれない。

彩色を終えてもまだ時間があるので展望所の方へ登った。そこで槍から常念までを描くことにした。常念が手前に来るので、燕から槍までの表銀座コースがすっきり描ける。牛首と西岳の間に裏銀座の野口五郎や水晶岳も頭を覗かせていた。燕から槍までの遠さ、起伏の大きさ、それを描きながら 60 年前に高 1 の私が初めての山登りでこのコースを辿ったことを思い出していた。昨夜の打合せでスケッチは 9 時終了と決めてあったが、私は 8 時半には切り上げて、橋本さん、菅沼さん、宇田さんを残して小屋へ戻った。田中清介さんは列車の時刻調べ、タクシーの手配問合せなど撤退の準備に掛っていた。

9 時半、存分に描いて大満足の全員が集合して下山に出発した。その頃にはもうガスが降りてきて山は隠れ始めていた。スケッチクラブ用に特別詠えの快晴だったようだ。三俣からは蝶への最短コースなので登ってくる人たちとたくさん行き違った。一日でピストンという人も少なくなかった。標高 2200m~2300m 位の谷の紅葉は最高だった。まめうち平から急坂を下ったこのルート唯一の

水場の冷水は格別だった。計画表通りに出発から4時間で三俣の駐車場に到着し、手配のジャンボタクシーに乗り込み一路豊科駅に下った。普通ならここで報告を終えるところだが、どうしても記録しておきたいエピソードがある。

松本駅で他所に立ち寄るという菅沼さんと別れ、残りの6人は2分後に発車する特急あずさのホームに急いだ。人影の少ない8号車の自由席で席を回転させて向い合わせの4人席を二つ作って落ち着いた途端に列車は動き出した。「弁当とビールを買えなかったね」「ワゴンで売りにくるでしょ」「いや、1号車の指定席から始めるからここまで直ぐには来ないよ」「それなら、こちらから買いに行きましょ」なんとせっかちなと思ったが、ご苦労様にも清介さん、宇田さん、小出さんの三人が出向いて行った。間もなく宇田さんが6個のビールを下げて戻ってきた。お金を払う前に戻ってきたと言う。追っかけて清介さん、小出さんが戻ったが、1号車まで出向いたのに弁当は牛肉弁当と釜飯弁当各2個しか買えなかったという。午後3時を回ってからの発車だから仕入れ個数が僅かだったのだろう。買いに出向いて良かったのだ。待っていたら売り切れていただろう。2個の弁当を3人で食べるというゲームが始まった。牛肉弁当は幕の内風だから分けやすいが、釜飯は分け難い。国境を決めて正雄の領域を分捕る。こういう食べ方も楽しいものだ。「一つ釜の飯を食う」とはまさにこのこと。絆も深まるというものだ。停車ごとに乗客が増えていたが、甲府ではたくさん乗って4人席を3人で占拠とはいかなくなった。私が女性3人の席に移り、清介さんと宇田さんは席を回転させて2人席に収まった。私と清介さんが通路を隔てて斜め向いに顔を合わせる形になった。間もなく車内販売嬢が弁当とお茶を持って通り過ぎ、戻ってきた彼女に清介さんが声を掛けた。「面倒をかけたね。ごめんね」

「あれっ？どうしたんですか？」私の問いかけへの答えは、小出さんの解説と私の推測を加えると次のようになる。買った弁当をレジ袋に入れもらって小出さんが受取り、清介さんが支払っているところへ一人の男がやって来て「牛肉弁当ひとつ」と注文した。「あいにくお弁当は売り切れてしまいました」「なに、売り切れ？お前ら買い占めたな。一つぐらい俺に譲れよ」「私たちも6人に4個しか買えなかったのでお譲りで来ません」「なんだと？お前らの席はどこだ」と男は凄んだようだ。男の怒りは当然弱い立場の売り子嬢に向う。「俺を飢え死にさせる気か。どうしてくれる」

この売り子嬢はワゴンを押してわれわれの席まで来たり、それぞれが追加のビール、お茶、アイスクリーム、コーヒーなどを買ったので私も顔を見ている。愛らしい容貌でその若さから到底ベテランとは言えまいが、プロとして有能であったことは間違いない。「申し訳ありません。早速に手配して、ご降車の前にゆっくり召し上がって頂けるように準備します。しばらくお席でお待ちくださいませんか。準備整い次第お持ちいたします」

松本を出て時間が経っているから、下諏訪はもちろん小淵沢でも心もとない。緊急事態の受け入れ余力があり時間的に余裕を持って対応できる甲府で積み込もうと判断して連絡をとったに違いない。しかも、その男はわれわれと同じ8号車の数列離れたところに座っていたのだ。清介さんはそれを知っていたのだろう。だから、甲府発車とほぼ同時に弁当を届け終えた売り子嬢に直ぐに声を掛けたのだ。とはいえ、小出さんは先取権を主張しただけだし、男とて暴力を振るったわけではない、売り子嬢は職務を遂行しただけだ。清介さんが謝る謂れは全くない。それでも清介さんは、いささかでも関わりを持った者として彼女の心情に寄り添い、悶着を起した客の言うべき台詞を代弁したのだ。私は清介さんのお人柄に感服して思った。これは浅田次郎か阿刀田高のような名手の筆に掛ればヒーリングな短編小説になるだろう。その結末は次のように締め括られるに違いない。

「デッキに停めたワゴンに戻ってきても、さりげなく囁かれた言葉が耳に残っていた。『面倒をかけたね。ごめんね』モンスター・パッセンジャーの脅し文句には顔色一つ変えずに対応した彼女だったが、あの一言を聞きたいま涙が一粒零れ落ちた」